



仇潜文庫

四

5

1139

4



置酒南窗
涼風
吹動水
池
爽氣在
葉著
涼

27

子

支

[illegible]

美山

七種よりけりて丸一落乃墓
垣より雲はくす輝きゆる雷
光
朝
曉
の
手
を
と
書
き
て
春
湖
あ
れ
一
荷
を
や
き
て
買
ひ
の
秋
を
と
け
は
月
乃
輝
く
あ
り
提
通
を
よ
い
と
し
く
湖

はさくと紫をきれねえ
と食方娘おさへ来
貝売ーかき菜をうみ
豆おーききききあり
地やきき度ききの
浦をぬきききき
名おのけききき
おきききおききの

山 佐 湖 山 佐 湖 山 佐

おききききき
いやきききき
おききききき
天きききき
多きききき
市おききき
船ききき
一板板ききき

湖 山 佐 湖 山 佐 湖 山 佐

換換をささるゝいささぬ横理屋
まゝ――牡丹のさきと――
――うねりなをささるゝぬささ
いささぬを又――ささるゝ
飯屋の屋根までささるゝささるゝ
髪押さるゝささるゝ陰 膳
たのまゝいささぬ花押のささるゝ
ちく――ささるゝぬささるゝ――

山 崎 佐 山 崎 佐 山 崎

卵をささるゝささるゝささるゝ
からささるゝささるゝささるゝ
何ささるゝささるゝささるゝ
子おささるゝ柏根の芽をささるゝ
ささるゝ町方西側ささるゝ
ささるゝささるゝささるゝささるゝ

山 崎 佐 山 崎 佐 山 崎

おとこは只此の世に
猫の如く

馬
其
木
根

1290

播 葉の聲 名——三打あけ

養山

手
未
一
子
一
子
子
子
子

伍

月曜々小月めか減るふあり

۱۲۱۳

夢をばけしむるは人の別

山

烟はくまゝやーをいふを伴う死
顔よりあはれうすき手あり
りゝあをほりけに足ゆる女あ
まゝみのこゑたり恋をさふ
はきゝものであつゝまゝの大いゝま
傘はくまゝやーをいふを伴う死
顔よりあはれうすき手あり
あゝい着あゝつあゝあゝあゝ

山 湖 山 湖 山 湖 山 湖

ひよきりきゝまゝをいふを伴う死
顔よりあはれうすき手あり
りゝあをほりけに足ゆる女あ
まゝみのこゑたり恋をさふ
はきゝものであつゝまゝの大いゝま
傘はくまゝやーをいふを伴う死
顔よりあはれうすき手あり
あゝい着あゝつあゝあゝあゝ

山 湖 山 湖 山 湖 山 湖

石燈のちもも通ちりし神り咲
新の下うゝ水田かきある
糸金ちはてきいつても新のり
溪のかさねぬきぬか
まんやうとすゝまねよりを袴
砂を水の無くやうきより
待ねよ着るまけきよりて
はよりふ核し柳の初まり

山 佐 湖 山 佐 湖 山 佐

柳きよりるのちうゝきより縮
陰糸もて垢離よりしり
き重ちもくすと触るおもさ
きあてけしきをもつたお花
田めより柳き重もきりき
海苔のうきりれきえぬ一さ

山 佐 湖 山 佐 湖

荻山

初蝶乃とんそんをさる垣植の鈴
さー末ふくはす白晴の鈴
師去の鈴の鈴あふさる切て
花脚のあひのさるやうなり
宵ねのうさるさるさるさる
鳴る流る水のさるさる

はんありとあそ急海あすまの上
 まるりがほーて持る酒飯
 一嘆をきてきんきー被第
 うやあり袖のあゝぬものい
 いそくと改みす一草をさうしあそ
 手紫乃瓜の實をむきあけ
 掛場あちあち定あゝぬ大工小屋
 さいきんたゝまゝ。紫雲の法習
 山 湖 山 湖 山 湖 山 湖

八

きかひー幸子のあそきあけり
 雪語ちきのかふ人ほそ
 片うきあゝかゝるるあな
 ま急きやーれあんけあゝ
 草あちあちさうさう骨休め
 老ゆるさうさうやあゝの皮
 上々京を好まざるよとよりて
 なうりきするあゝのみにとら
 山 湖 山 湖 山 湖 山 湖

ほろろとそそゆりくす窓のりかり燈
とろろと申すハ巨燈ふる海
とろろと風吹流のる雪のあり
卵よりのそそすかる葉の
ほろろと子供よ持を欄の柳の
落つくさ記のりそそぬ松立
そのり茶のその眼の線出る
子柳のそそるやそそえの尻

山 湖 荻 山 湖 荻 山 湖

ほろろとそそゆりくす窓のりかり燈
とろろと申すハ巨燈ふる海
とろろと風吹流のる雪のあり
卵よりのそそすかる葉の
ほろろと子供よ持を欄の柳の
落つくさ記のりそそぬ松立
そのり茶のその眼の線出る
子柳のそそるやそそえの尻

荻 山 湖 荻 山 湖 荻 山 湖

晚生未偏覺
萬物皆輕
一片心
此心

戊午年

楊石齋

光緒二十九年
自香遠簾
生新

